第8回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

中学生の部　優秀賞

「私も、出来ることから」

福島四中1年　明石　実さん

この新聞記事は、広島の24歳の青年が原爆について勉強し、三年もの間原爆ドームの前でボランティアガイドを続けているということについて書いてあった。

私は太平洋戦争について学校で学習したり、テレビや新聞などで見たり聞いたりして、多少は知っていたが、特に強い関心があるわけではなかった。私の祖母は、子どものころに戦争を経験していると聞いたが、直接くわしい話を聞いたこともない。戦争の時には、戦争に行った兵士だけでなく、普通の人もたくさん命を落とし、私と同じような、またそれよりももっと小さな子どももたくさん死んでいったということは話を聞いても、全然実感がわいてこないのが正直な気持ちだ。終戦から72年。私から見ると、戦争はあまりにも昔のことで身近に戦争のことを感じさせるものもないため、自分から遠いものだと思っていた。

でも、この青年は広島の原爆ドームについて調べ、自ら、しかもボランティアで活動しているのがすごいなと思う。私が一番驚いたのはやはり、「若さ」だ。

戦争のことを次の世代に伝えていくのは、戦争を経験した世代の人がやるものだと思っていた。戦争を経験した人や被爆者は年々高齢化していて、数が減っていく中、戦争や原爆のことを受け継いでいく人が必要だと思う。記事の中にもあるが、広島の中でも原爆についての関心は高くないという。それは多分、広島の人だけでなく日本全体で関心が薄れていっている気がする。それは私も同じだからだ。でも、この青年のように若くても、戦争を経験していなくてもがんばってくれている人がいるということを知り、私は自分が恥ずかしくなった。今まで私にそんな考えはなかったし、「誰かがやってくれる」そんな風に思っていたからだ。私もただ誰かが伝えてくれるのを待つだけでなく、自分でも何かできることを見つけられるようになりたいと思うようになった。

日本は唯一の被爆国だ。戦争も原爆ももうこの先もずっとずっと繰り返してはいけないことだ。だから、戦争のことは伝えていかなければならないと思う。戦争のことは昔のことだから自分とは関係ないように思っていたら、そのうちまた同じ過ちを繰り返すかもしれない。

「被爆者の家族でも、戦争を知らなくても、誰でも伝える役割を担える。」

記事の中で青年が言っていたように、いきなりボランティアは無理だけど、まず、戦争のことを知ることからやっていきたいと思う。そして、将来伝える役割が出来れば良いなと思っている。また、戦争のことにかかわらず、色々なことを「誰かがやってくれる。」という考え方ではなく、「自分から」という考え方で行動していきたい。

「核廃絶のための日本の役割」

清水中3年　宍戸　涼真さん

「被爆国として何をすべきか。」

記事を読んで率直に思った。核兵器は本当に恐ろしい。その恐ろしさを知らない人々はたくさんいる。唯一の被爆国として、被爆者がいる国として核廃絶のために日本の使命は何なのかを考えさせられた。

核兵器禁止条約に日本や核保有国が参加しなかった。核なき世の実現が難しいという考えがはっきりと頭に浮かんだ。多くの被爆者の声を聞いてきた日本までが、核の傘だからという理由で参加しないのは異常だと思う。被爆国として一生懸命核なき世をつくりあげようとしてきた今までの活動を裏切る行為だ。日本は苦しめられた核に守られていて恐ろしさや不愉快な感じはないのだろうか。核で守られている平和は目指している平和とはちがう何か違いものものように感じる。核の傘であれば、核を持ちこんでいることと同じで、非核三原則に反すると思う。核の傘に頼りすぎないように、自国で安全を保障できる対策をしてほしいと思う。

世界に目を向ければ、北朝鮮は核・ミサイル開発を進め、それに対抗してアメリカはトランプ大統領の就任により、核などの戦力増強を図っている。アメリカと北朝鮮の冷戦のような状況は一進一退である。核廃絶を訴える日本にとっては苦しめられた核に守られていて恐ろしさや不愉快な感じはないのだろうか。核で守られている平和は目指している平和とはちがう何か違いものものように感じる。核の傘であれば、核を持ちこんでいることと同じで、非核三原則に反すると思う。核の傘に頼りすぎないように、自国で安全を保障できる対策をしてほしいと思う。

世界に目を向ければ、北朝鮮は核・ミサイル開発を進め、それに対抗してアメリカはトランプ大統領の就任により、核などの戦力増強を図っている。アメリカと北朝鮮の冷戦のような状況は一進一退である。核廃絶のための大きな力となる被爆者が奮起している姿には心打たれる。僕はそんな被爆者の話を聞くことが、今自分にできることではないかと思った。

「原点見据え核兵器禁止を」という記事を読んで、日本政府の未熟さを感じるとともに、被爆者の偉大さを感じることができた。核保有国と向き合い、積極的に核反対の姿勢を見せ、被爆者の声を世界に届ける活動を地道に行っていくことが大切だ。被爆者がいる間に、核なき世をつくりたいと僕は思った。

「自分自身への挑戦」

郡山四中1年　鈴木　拓紀さん

両手を高く突き上げ、渾身の力を振り絞ってゴールする選手の写真が、僕の目に飛び込んできた。すごい――。かっこいい――。僕は、夢中で記事を読んだ。

一面を大きく飾ったこの写真は、インターハイの陸上男子一五〇〇メートル決勝のゴールシーンだ。学法石川高校の半沢黎斗選手が高校歴代二位の驚くべきタイムで優勝した瞬間だ。学法石川高校は、この種目で三連覇がかかっていた。一昨年は田母神選手が、昨年は遠藤選手が優勝している。どちらの選手も、陸上界のスター選手である。遠藤選手は、なんと僕の中学校の先輩である。中学時代から数々の大会で何度も優勝している憧れの大先輩だ。遠藤選手が活躍している記事を見るたびに、なんだか自分のことのように誇らしい気持ちになる。

そんな雲の上の存在である偉大な二人の先輩と同じ陸上部に所属し、大きな背中を追いかけながら練習を重ねてきた半沢選手。レースは終始ハイペースで進み、勝負は最終の直線だった。同じ学法石川高校の久納選手もその先頭集団にいた。最後の直線を内と外のどちらから攻めたかで、明暗が分かれた。陸上の駆け引きの難しさであり、おもしろさだと僕は思った。予選では、久納選手が一位通過している。決勝では絶対に負けたくない。半沢選手はもちろんそう思ったはずだ。遠藤選手が活躍している記事を見るたびに、なんだか自分のことのように誇らしい気持ちになる。

そんな雲の上の存在である偉大な二人の先輩と同じ陸上部に所属し、大きな背中を追いかけながら練習を重ねてきた半沢選手。レースは終始ハイペースで進み、勝負は最終の直線だった。同じ学法石川高校の久納選手もその先頭集団にいた。最後の直線を内と外のどちらから攻めたかで、明暗が分かれた。陸上の駆け引きの難しさであり、おもしろさだと僕は思った。予選では、久納選手が一位通過している。決勝では絶対に負けたくない。半沢選手はもちろんそう思ったはずだ。切磋琢磨するライバルがそばにいること。憧れの存在がいて、その背中を追いかけて練習ができることは、とても恵まれた環境である。そして、それがチームの伝統になり、強さになっていくのだと思う。勝ち続けることは、もちろんすごく難しいことだ。そのプレッシャーは、僕の想像をはるかに超えると思う。しかし、そのプレッシャーを力にすることができる選手が、本当に強い選手だと僕は思った。

今年中学生になった僕は、初めて中体連の陸上大会に出場した。種目は一五〇〇メートル。コンマ何秒の差で表彰台を逃した僕は、悔しくて悔しくて涙が出た。だからこそ、インターハイという最高の大舞台で、コンマ何秒の世界を競い合い、優勝を勝ち取った半沢選手のすごさをより一層強く感じた。

毎日の練習は、もちろんきつくてへとへとになる。でも、先輩の背中を追いかけ、必死になって頑張っているときの自分は、どこか気持ちがいい。そして、タイムが少しずつ向上するのが、たまらなくうれしい。

この夏休みは、駅伝大会に向けての練習をしている。暑い中での練習は、一段と厳しく辛い。先輩に比べたら、記録的にはまだまだな僕だ。でも、この記事を読んだ僕には、大きな目標が見えた。そして、大きな力をもらった。先輩たちの大きな背中を追いかけ、これからも自分自身に挑戦していきたい――。

高校生の部　優秀賞

「障害者が安心して生活できる社会へ」

福島東高2年　鈴木　京さん

「『障害者の環境悪化』7割」という大きな見出しが目に飛び込んできた。相模原の障害者施設殺傷事件から一年となるのを機に、全国の知的障害者の家族にアンケートを実施したという。回答した三〇四家族の七割近くが、事件後、障害者を取り巻く環境が悪化したと感じ、インターネットでの中傷や利用する施設・職員への不安が増したとの回答が目立つと記事で伝えている。

この記事に、私は大きな衝撃を受けた。あの事件を受け、障害者の人たちが生きやすい社会をつくるための取り組みがなされ、改善されているものだと思い込んでいた。しかし、そうではないという現状をこの記事で知った。起こってしまった失敗から何かを得て、よりよい方向へ改善していくべきであるはずなのに、環境が以前より悪化してしまっているなんてあってはならないことである。また、事件を起こしたのが元職員であったことから、利用する施設・職員への不安という別の懸念材料が浮き上がってしまっていることにも大きな驚きを感じた。もし自分が障害者の家族だったとして、信頼している施設でこんなことが起きてしまったら、自分は誰を、どこを頼ればよいのだろうと大きな不安に襲われると思う。障害者や障害者家族にのしかかる不安は大きくなっていく一方で、障害者が安心して暮らしていける社会はなかなか創られてはいかない。自分の中に、どうにかしたいけど、どうすることもできないというもどかしさが生まれている。

そして、今のインターネット社会特有の問題、インターネットやSNSでの中傷。これはかなり深刻な問題であると思う。相手の顔が見えないという特徴から、平気で他人が傷つくことを書けてしまう上に、書いた情報は消せないし、どんどん広まってしまう。私たちがどうこうできる範囲を超えてしまっている。どうしてネットで中傷するか、私にはさっぱり分からない。中傷しないように呼びかけたところで、完全にネットでの中傷がなくなることは、正直ないと思う。しかし、中傷する人の心に呼びかける行動を何かしていかなくては、より悪化してしまうのではないかと思う。

私たちにできることは何なのだろうか。悪化している環境を良くするのは難しい。しかし、障害や障害者のことについて調べたり、理解することなら私たちにもできる。若い世代が率先して障害者について知って、社会を創っていけば、少しは障害者が安心して暮らせる社会に近づいていけると思う。そしていつか、障害者やその家族が本当に安心できる社会を実現させたい。自分ができることは、とても小さなことではあるが、明るい未来のためにできることを精いっぱい頑張りたい。

「『先送り』にならないために」

葵高1年　田村　彩香さん

この記事は、政府の待機児童解消計画について書かれたものだ。今まで二〇一七年度末に待機児童「ゼロ」を目標にしてきた。しかし、想像以上の女性労働者増加のため三年先送りしたということだ。

たしかに、働く女性が増えていることは事実であり、政府側も予算の計画が難しいのであろう。幼稚園教諭や保育士が不足しているのも現状である。しかし、私は「先送り」というこの言葉が気にかかった。待機児童問題は何年も前から存在している。やっと最近少しずつ目を向けられるようになってきた。先送りや様子を見るという言葉はうまく使われるなと思うことが多くある。私が最近読んだ児童虐待についての本にも、「会議があっても結局『様子を見ましょう』ということが繰り返される。」という内容が書かれていた。私はこの新聞記事を読んだとき、この問題もあの本に書かれていたようなケースになるのではないかと不安を抱いた。

これらを踏まえ、私も待機児童解消の手段を考えた。まずは保育士の確保だ。現在、保育園と幼稚園が合体した「こども園」というために、この問題は引き起こされている。そのために、週休二日の確保や昇給制度など、働きやすい環境づくりや保育士のやる気を高める制度を設ける。また、再就職支援である保育士マッチングプロジェクトや、ブランクなどで再就職を躊躇している人のための講習会などをもっと広めることが第一歩だと考える。一年間で三万人以上の保育士が辞めてしまっているこの課題を解決しなければ待機児童は解消されないままだ。次に保育施設の改築、増加だ。保育施設が増えてきている。こども園を推進し続けるとともに、マンションでの保育所設置、家庭的保育事業の増加に取り組み、保育の受け皿を整備していくことで目標達成に近づくのではないか。

私の将来の夢は、保育士と幼稚園教諭の免許を取得し、こども園で働くことだ。今年四月時点で全国の待機児童数は二万三五三人に上っている。私はこの子どもたちにも平等に保育を受ける権利があることを強く主張したい。将来、保育施設で働き、一人でも多く保育が受けられる環境づくりに貢献したい。またこれからも新聞を読み、待機児童だけでなく保育士確保や政府の計画など、社会情勢に強く関心をもっていきたい。